世界の民話

アメリカ大陸〔II〕

●

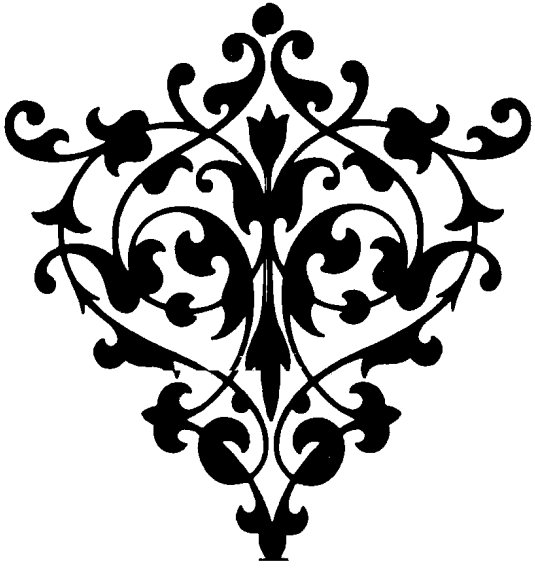
北米インディアン
コルディリェーラインディアン
アステカ・インカ

世界の民話

アメリカ大陸〔II〕

北米インディアン／コルディリェーラインディアン／アステカ・インカ

小沢俊夫 編　関 楠生 訳



ぎょうせい

編訳者紹介

小沢俊夫

日本女子大学教授

ISFNR(国際口承文芸学会)副会長

関　楠生

東京大学教授

小沢俊夫 編©

世界の民話 12 アメリカ大陸Ⅱ

昭和52年4月10日　発　行　　定価1,500円（送料200円）
昭和52年10月1日　第2刷

訳　者　　関　楠生

発行所　株式会社　ぎょうせい

本　社　東京都中央区銀座7の4の12
営業所　東京都新宿区西五軒町52
（郵便番号162）
電話　代表　(268) 2141
振替口座　東京4—10,000番

印刷　(株)行政学会印刷所(SK)　　製本　大口製本印刷(株)

＊乱丁，落丁本はおとりかえいたします。

はじめに

交通機関やマス・メディアの発達で、私たち日本人も、今日ではほとんどどこへでも行けるし、なんでもテレビジョンなどを通じて見ることができるようになり、少しばかり世界が広がってきたように感じられます。しかし、そうやって旅行によって見ることのできる生活とか、テレビジョンによって知ることのできる社会の内側に、外から見ただけではわかりにくい、民族の心の生活があるものです。

私たち自身について考えてみても、外国人の目には、日本人は今どこでも、いわゆる近代的な、合理的な生活をしているし、しようとつとめているように見えるでしょう。しかし私たちの生活にはそういう近代化、合理化の流れとは別に、相変わらずみそ汁やつけものなど日本の昔からの食べ物をおいしいと思う心があり、畳の肌ざわりを心地よく思い、自然を身近に感ずる感覚があります。そして義理と人情を大切にし、お茶をたしなんだり、お花をいけたり、あるいはいけられた花を見るとホッとする気持ちがあります。そして郷土の歴史や民謡や民話に強くひかれる気持ち、そしてみんなが共通の民謡や民話を知っていることからくる一種の連帯感、そういうことは観光にきた外国人にはなかなかわかりにくいだろうということは誰にでも想像できることです。そしてまた、ほんとうはそういういちばん基本にある文化をお互いに知り、そして理解しあったら、異民族の間の理解は奥行きのあるものになるだろう

ということも、容易に想像できると思います。

民話はそういう意味で異民族をつなぐ大切な財産だと思うのです。なぜなら、民話の中にはそういった気持ちやら心やらがいっぱいつまっているからです。民話は、学問や芸術、スポーツ、観光、貿易、外交などでつきあっている諸民族を、もっと奥の方でつなぐものだと思います。それが証拠には、外国に行って、その国の民話をこちらが知っていることがわかった時、どんなに喜ばれ、親しくなれることか。これはもう例外のないことです。

これについては逆のことを想定していただけばよくわかると思います。あなたの目の前に近隣のアジア人や、厚い毛皮に身を包んだエスキモー人、あるいは青い目をした西洋人が現れた時、もしその人が日本の羽衣の物語や桃太郎の昔話を知っていたら、あなたはどんなに親近感を持つことでしょう。民話は人と人を結びつけてくれます。たとえ人種が違っていても。

ほんの百五十年ほど前、日本でいえば徳川時代末期に、あのグリム兄弟は民話に対して初めて学問の目を向けました。そしてそのころは主として故郷であるヘッセン州の民話を集めていたので、兄のヤーコプがわずか数百キロメートル離れた土地に類似の話を見つけると、驚いてわざわざ弟ヴィルヘルムに手紙で報告したほどでした。ところが今日では、極東の日本列島と近隣アジア諸国はもちろんのこと、ヨーロッパの間にさえ類似の話があることがわかってきました。それがなぜ類似しているのかという問題についてはまだまだ研究されなくてはならないのですが、類似の話を比較してみると、話の骨組みは類似していて、その肉付け、色づけは民族によって異なる、ということがだんだんわかってきまし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。それはつまり、骨組みにおいては共通性が強く、肉付けにおいては民族的特性が強いということになります。

それは例えば、あちこちの土地で掘った井戸の水が、実は同じ地下水でつながっているというようなことと似ていると思うのです。つまり同じ地下水でつながっているという意味で民話には諸民族の間に共通性があります。しかも、掘った土地の土質やいろいろな要素によってその地下水の味わいが違うのと同じように、それぞれの土地で語り継がれてきた民話には、それぞれの土地柄とか、民族の特質がしみこんでいるのです。

諸民族の間に類似のものがわかってきたということは、共通でないものもわかってきたということです。そういう共通性のない話には、民族的特色がいっそう強く出ているように思います。それはそれでまた、民族の相互理解のために貴重なものです。そこにはその民族の風俗習慣、自然や神への考え方、人生への考え方が、はっきり現れているからです。

ところで地球上のあらゆる民族のなかにこのように互いに類似した民話や、それぞれの民族独特の民話があるのはどうしてなのか、という疑問、あるいはまた、そもそも民話はどうやって生まれてきたのだろうかという疑問は誰でも感じると思います。グリム兄弟以来ヨーロッパの学者たちはずっとこの問題についていろいろな考えを打ち出してきていますし、日本でも柳田国男、高木敏雄などの大先達以来考えられている問題なのですが、誰もが納得する定説というところまではまだいっていません。民話の由来に関していえば、民話の中心となる多くのものは神話の衰えた姿であるという考えがグリム兄弟以

来あり、日本でも有力な考え方といえます。つまり神々の物語である神話、あるいは民間信仰上の物語の一部が、ごく世俗的に語りなおされたものが民話であるという考え方です。そういう可能性はありえたのでしょうけれど、最近では逆に、数々の民話が先にあってそれが組み合わされ、神話的思想が注入されて神話という形にまとめられたのではないか、という考えもあります。

神話とは関係のなさそうなそつきの話とか、なまけ者、愚か者の話にいたっては、それがいつ生まれたのかということは、全く推定しかできない問題です。なにしろ民話は口で伝えられてきたのであって、文字の記録がある場合（例えば説話文学という形で）でさえも、その話の最低年齢を示すにすぎず、その文献よりどのくらい前から話されていたのかについては、証拠がないのです。

諸民族に共通して語り継がれている話についても二つの考え方があります。ひとつはどこかに起源があってそれが各地に広がったという考え方。もうひとつは、人間はだいたい同じようなことを考え出すものだから、地球上の諸民族が似たような話をそれぞれ考え出して語ったとしても不思議ではない、という考え方です。グリム兄弟は前者の考え方で、その起源はアーリアン族（インド・ゲルマン語族）にあるとしました。その後、インド起源説（ドイツのテオドール・ベンファイ）も唱えられたことがありますが、今日の研究者のあいだでは、起源の問題は、ひとつひとつの民話タイプについて、できるだけひろく諸民族から類話を集めて地理的分布を調べ、それに古い文献によって歴史的経過を明らかにして研究しなければならない、という考えが有力です。

民話があちこちでそれぞれ独自に発生してそれが偶然に一致したものであろうという考えは最近では

まとまった形では出されていませんが、短い話や笑い話などの場合には十分考えられることだと思います。つまりひとつのモティーフだけで成り立っているような話の場合には、偶然に類似することも十分ありうるだろうと思います。しかしある程度長い話、つまりいくつかのモティーフが一定の順序で結びついてできているような話が、そっくりそのまま互いに似ている場合にも偶然の一致と考えることはどうも無理のようです。ではどうやって伝播したかという問題になると日本のような島国の場合はむずかしいことになりますが、やはり起源の問題は個々の話型についてこれから検討されなくてはならないわけです。

さて、異国の民話を読む方々に多少とも理解の助けになるかと思い、研究上のことを御紹介してきましたが、何はともあれ、楽しく読んでいただけばよいわけです。民話は昔から、家族みんながいっしょに火を囲んで聞いたり、男だけの仕事場で聞いたり、子供だけでおばあさんを囲んで聞いたりしてきました。つまり、現在考えられているように子供のためだけのものではなかったのです。共同体のなかでのその民話本来の役割を生かすために、ここでも家族のみなさんがそれぞれ読んでおもしろいように、変化に富んだ選び方をしてあります。幼い読者向きのかわいい話があるかと思えば、青少年向きの長い冒険物語がある。かわいそうな女の子の物語があるかと思えば、年齢を問わず笑ってしまうようなばかな話がある、というぐあいです。何か比喩的な深い意味をそこに感じ取ってもいいし、ただおもしろく読むだけでもいいのです。民話は昔から、いろいろな人によっていろいろなふうに受け取られ、いろいろなふうに次の世代に向かって語られて、伝承されてきたのですから。

この十二巻の「世界の民話」の中には、いろいろな民族のおとぎの世界が繰り広げられています。シベリアの寒い国で語られるおとぎの世界もあれば、昔からおとぎ話の好きなアラビア人の奇想天外なおとぎの世界、あるいは西部劇でしか知られていないアメリカ・インディアンの人たちの語るおとぎの世界などです。

なるべく多くの民族の民話を取り入れたのは当然ですが、今まで日本に民話が紹介されたことのない民族のものはすこし多く選びました。例えば今でも民話を語っている東ヨーロッパの諸国とか、東洋系でありながらヨーロッパのなかを流浪しているジプシーの人たちのもの、日本の近くでありながら、その文化的な面がほとんど知られていないシベリア居住の民族、モンゴル民族のものなどです。あるいはまた、スイスといえば風光明媚で知られていますが、そのアルプス山塊の奥深く住んでいるレートロマン族のことは日本ではほとんど知られていません。この民族のことばはスイスの第四番めの国語として認められていることも御存じない方の方が多いでしょう。このレートロマンの人びとはとても豊かな民話をもっているので、これも特に考慮して多く収めてあります。

ところで異国の民話を読むとき、日本の民話を想い浮べ、比べてみたくなるのは自然なことだと思います。日本では大正時代の中ごろから昭和の初めにかけて柳田国男が昔話に対する世の注目を呼び起こし、採集をすすめました。そのころには、昔話は今集めないと、もう二度と集められなくなるという気持ちが強かったのです。それから戦争を経て、昭和三十三年には関敬吾により「日本昔話集成」全六巻（角川書店）という記念碑的な労作が完成し、それまで集められた昔話を集大成し、その後の民話研究

の基礎が築かれました。ところがその後、民話の採集が極めて盛んになり、今はなまの録音から文字にした貴重な民話資料が続々刊行されています。この「世界の民話」と並べて日本の民話を読んでいただくと、民族による民話の違いなど、民話のおもしろさがいっそう理解しやすくなることと思います。

この「世界の民話」の底本としたものは、西ドイツのオイゲン・ディーデリヒス社から出版されている「世界文学の民話」（フリードリヒ・フォン・デア・ライエン、クルト・シャー、フェリックス・カールリンガー共編）という大きなシリーズです。これは第二次大戦以前からありましたが、大戦後、再び新たなシリーズとして、部分的には旧シリーズを受け継ぎながら発足し、今日までに六十冊近い世界最大の民話シリーズとなり、今なお刊行中です。それは文字どおり世界の諸民族の民話を含んでおりますので、私たちの「世界の民話」では、そこに含まれている民族のほとんどすべてから民話を選び出して十二巻にまとめてあります。原書の各巻は必ずしも国別でなく、民族別に編集されていることもありますので、この「世界の民話」でも民族によって分けることもいたしました。

この「世界の民話」はドイツ語圏の民話を除いてはすべてドイツ語からの重訳ということになりますが、日本からでは直接入手できないような民族の民話を数多く収めていますので、それなりに意義があろうと考えています。

各巻に二葉の口絵がそえられています。国際美術教育学会の前会長で春陽会会員の倉田三郎画伯、同じく春陽会のこさかしげる先生、挿画界で活躍しておられる上泉秀俊先生の御協力で、おとぎの世界の

雰囲気を描いていただいたものです。記して感謝いたします。

世界の民話を日本に紹介することは編者が長年抱いていた願いでした。この大きな、やっかいな民話集の翻訳刊行の意義を認められ、引き受けて下さった「ぎょうせい」に対し感謝いたします。特に異例の御協力をいただいた荒川常務、森田企画課長、そして全面的に編集を助けて下さった金井勝利氏に厚く御礼申しあげます。

一九七六年九月　相模原にて

小沢　俊夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世界の民話 12 アメリカ大陸Ⅱ

もくじ

北米インディアン

一 ナヴァホ族インディアンの宇宙（ナヴァホ族） 3

二 ガエ（チリカワ＝アパッチ族） 14

三 アコマの四人姉妹（ケレサン＝プエブロ族） 20

四 へびの昔話（ホピ族） 29

五 くま狩り（フォックス族） 36

六 雷神（クリーク族） 38

七 うさぎが火を盗んだ話（クリーク族） 41

八 舌なし（アリカラ族） 47

九 とうもろこし母さんと黒い流れ星（アリカラ族） 55

十 年とった栗毛の馬（ポーニー族） 59

十一　魔法の棒（チムシアン族）　65
十二　冒険の航海（クワキウトル族）　71
十三　さけの話（ウィシュラム族）　76
十四　ふしぎな石のカヌー（チッペワイヤン族）　83
十五　影の国への旅（タナイナ族）　87

コルディリェーラインディアン

十六　イェルバの木はなぜ枯れないか　97
十七　神の持ちものであるキウェル＝キウェルの花　98
十八　太陽とエーデルワイスと赤い実のなる灌木　101
十九　空飛ぶ島とすべての木々の父　103
二十　大地から生まれた黄金――魔術師のとうもろこし　106
二十一　チャペルコ山系に属するクル・マウイダ山　109
フリラムチャ山の怒れる霊　109

二十二　ウェニョウェニョ川に住む、口がきけず耳も聞こえない鴨(かも)　111
二十三　白いたちとその呪(のろ)い　114
二十四　男たちが妻を選ぼうとしたとき　117
二十五　トレングトレングという名の男　132
創造・太陽と月・大洪水　132
創造された人間とけもの　137
創造の山　141
援助者トレングトレング　144
二十六　雪と氷の山と乾燥と世界の終わりについて　147
王と息子と氷の山　150
二十七　ロログの黒い幽霊犬　152
二十八　冥界で。涙の川と渡し守　155
二十九　白人たちがやってきたとき。インディオはどんなことでも決して忘れない　160
三十　地下にある影の国を信じなかったインディオ　166

三十一　女魔法使いはどのようにして馬をなおしたか　172
三十二　王女の白皮のシーツ　175
三十三　「吠える森」と「青い沼」が捨てられたとき　183
三十四　落ちつかずにさまよう影、カルクウェケ　196
三十五　白人がだした六つの問いと、インディオがだした六つの問い　203

アステカ・インカ

〈アステカ族〉
三十六　天を立てる　215
三十七　人間と食用植物の起源　216
三十八　三つの死者の国　221
三十九　ケツァルコアトルの若き日の物語　228
〈アステカ族の原初時代〉

四十　アステカ族の流浪伝説　234
古い絵文字は物語る　234
なぜアステカ族は原故郷アストランを捨てたのか　240
最初の争い　241
どうやってタラスカ人を置きざりにしたか　243
ユイツィロポチトリがアステカ族に未来の首都の幻影を見せる　244
コピルのいけにえ　247

〈キチェー族とカクチケル族〉

四十一　文化の起源　249
キチェー族の伝承による　249
カクチケル族の伝承による　256
四十二　神聖な手と足の跡　261

〈マヤ族〉

四十三　ユカタン半島に住むマヤ族の神と世界像　263

最高神 263
イツマルの五柱の神々 264
天を担う四柱の神 266
死者の運命 267
人間の創造 268
世界の没落 268

〈ムイスカ（チブチャ）族〉

四十四 兄妹 269

〈インカ帝国の諸民族〉

四十五 コン 272
四十六 パチャカマクとウイチャマ 273
四十七 ワリャリョとパリアカカ 278
四十八 諸種族の原初時代から 293
エクアドル海岸の巨人たち 293
カラの移住 295

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com